ふくいミュージアム

1992.3.31
No. 21

福井県立博物館

福井新聞

明治十七年七月六日　第七百七十三號

官令

福井縣錦串

福・井・新・聞

本県最初の日刊紙　『福井新聞』明治17年７月６日付第一面

「福井新聞」と題する新聞は、本県において今日まで計４回発行されています。これはその第１番目のものです。

春の企画

館蔵資料展 ～ふるさと再発見 Part 2～

4月19日(日)→5月24日(日)

－開催趣旨－

博物館では、開館以来、本県の自然や歴史・民俗などに関する資料の収集につとめてきました。これらの資料は、常設展や特別展に展示してきましたが、まだ多くのものが未公開のままです。

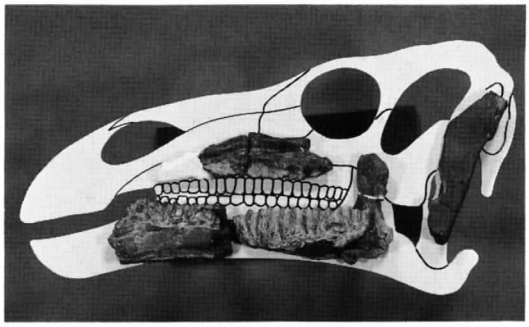
今回は、先の「館蔵資料展」にひきつづいてその－Part 2－と題し、自然・歴史・民俗の分野から未公開資料を中心に6つのテーマで展示を試みました。本展を通して、ふるさと“ふくい”を再発見していただければ幸いです。

－展 示 テーマ－

I 恐竜の骨化石／II 恐竜の足跡化石

博物館では、平成元年度から勝山市北谷で恐竜の発掘調査をすすめています。この調査によって、数多くの恐竜の足跡や化石が発見されました。

このコーナーでは、その中から、恐竜をはじめとするハ虫類・鳥類・両生類の足跡化石や、背骨・大腿骨などの恐竜化石を紹介します。足跡化石は、日本初の足跡動物群と呼べるものです。これが幾層にもまたがって発見されたことから、発掘現場付近が長期間にわたり、恐竜だけでなくいろいろな生物が住む場所であったことが判明しました。また、恐竜化石では、背骨や大腿骨などの骨格部分がまとまって発見されました。その結果、日本ではじめて全身骨格の復元が可能な状態に近づいてきました。



発見されたイグアノドン科の頭部

III 山田保治氏民芸品コレクション

昭和初期、柳宗悦らによって、日常雑器がもつ「美」を見出だそうとする民芸運動が起こされました。今立町出身の故山田保治氏も、はやくから柳らと交流を深め、民芸品の収集につとめた人物です。同氏が長年にわたって集めた民芸品は、昭和42年(1967)、福井県に寄贈、岡島美術記念館で展示公開されことになりました。しかし、平成2年に同館が閉館された後、公開の場を失いました。

このコーナーでは、同氏のコレクションから陶器・木工品・染織品などを中心に、約50点の民芸品を紹介します。なかには李朝白磁の大壷や黄瀬戸水滴などのように、美術品として優れたものもあります。

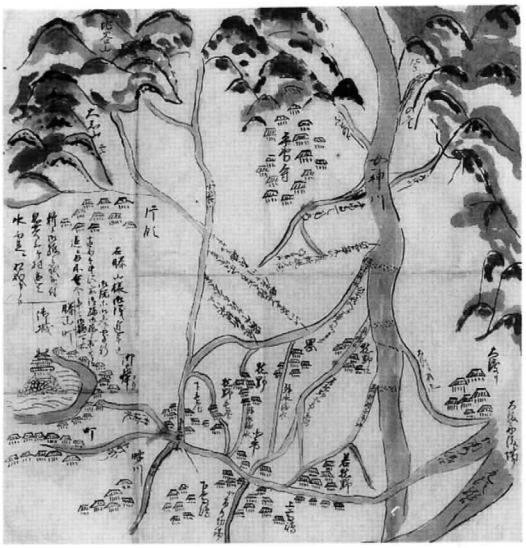
墨 壷

IV 新聞のあゆみ

新聞のあゆみは、文化のあゆみであり、社会のあゆみといえます。幕末・維新期に産声をあげた新聞は、徐々にその姿・内容を変えながら、近代マスメディアとして発展・成長をとげました。

本県でも、明治5年(1872)創刊の『撮要新聞』を先駆とし、明治前期から昭和戦前期にいたるまで、さまざまな新聞が発刊されました。そのうち、今日では紙名すら忘れ去られたものが少なくありません。また、全国紙の地方進出もめざましく、大正後期から昭和初期は新聞の百花斉放の時代となりました。

このコーナーでは、本県の地元紙を中心に、往時のさまざまな新聞を紹介します。



大野郡女神川筋の用水見取図

V　江戸時代の絵図

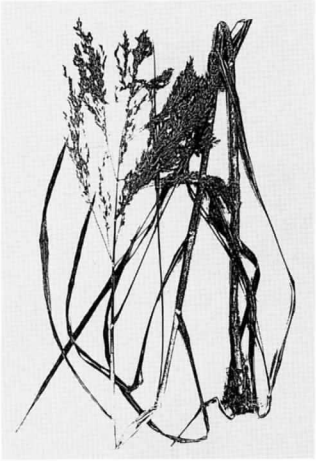
江戸時代には、多くの絵図が作られました。そのほとんどは、領主の地域把握、田畑や山河・用水の境界・利用をめぐる争論の付図として作成されたものです。どちらかといえば、公的な性格をもつものでした。

絵図は、対象・問題となった地域の景観をくわしく描いており、当時の地域の生活空間をよりビジュアルによみがえらせてくれます。

このコーナーでは、江戸時代に作られた越前の町や村の絵図を紹介します。

VI　福井県初記録の植物

このコーナーでは、最近、福井県内で初めて確認された植物を紹介します。主な展示標本は、ヒロハノドジョウツナギ・ヒメコウガイゼキショウ・ルリハコベ・ホウキオオバコ・ヒメイタチシダなどの高等植物や、県内ではめずらしい冬虫夏草菌の仲間のセミタケやカメムシタケなどの菌類です。

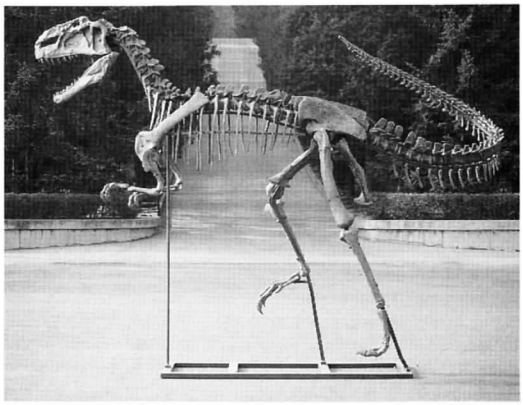


ヒロハノドジョウツナギ

秋の企画

共催展　生命の大進化　～中国の化石でたどる35億年～

9月12日(土)→10月18日(日)



モノロフォサウルス全身骨格

地球が誕生してから46億年、海から発生した生命は、長い地質時代のなかで環境に適応しながら進化を続けてきました。しかし、現在は人類の生活が地球の自然環境に多大な影響を与え、地球的規模での問題を引き起こしています。本展は、過去の生物たちがくり返してきた繁栄と絶滅の歴史を見つめなおすことで、未来を模索する一つの機会となることを願うものです。

主な展示資料は、中国で発見されたストロラトマイト・三葉虫・植物・昆虫・ハ虫類・恐竜・ホ乳類の化石です。

研究ノート

福井県内出土の皇朝十二銭について

皇朝十二銭とは、古代律令国家が発行した銅銭の総称で、別に「本朝十二銭」ともいわれている。発行された銭貨は、銀銭、金銭を加えると14種類である。

銭貨は唐の制度にならい、経済的側面をもって発行された。その経済的効果について、栄原永遠男氏は『律令国家は、国家財政における経費の一方的な増大、それによる租税収入との対応関係の破壊という事態を前にして、(中略) 独占的に銭貨を鋳造し、その銅銭に地金の銅より高い法的価値を付与し、その法的価値で、雇用者の功直をはじめ種々の支払いに用いた。銅銭に含まれる地金の銅の原価や鋳造経費はわずかであるから、銭貨を支払いに用いることによって得る利潤は巨大であった。』[①]とした。銭貨はこのような経済的側面ともう一方では、元興寺の塔心礎に和銅開珎・萬年通寶・神功開寶が納められていたことや、平城宮跡の一連の発掘調査によって建設に伴う地鎮に使用された多くの皇朝銭が確認されていることなどは、銭貨が宗教的器物としての一面を持っていたことを如実に示しているといえよう。

福井県内においても、少なからず古代銭貨である皇朝十二銭が出土している。表1に示したものは現時点において、筆者が確認できたものである。これ以外に坂井町と敦賀市櫛川地係で和銅開珎が確認されているが、不明確な部分が多いのでここでは省いた。総数にして82枚余であり、長年大寶を除けば、ほぼ和銅開珎から隆平永寶まで8世紀代に初鋳された銭種に集中している傾向がうかがえる。

つぎに、皇朝銭を確認した主な遺跡の出土状況を表1にしたがってみてみよう。

2．上莇生田遺跡江跨地区[②] 旧河道の肩口からの出土。周辺で9世紀初頭ごろの墨書須恵器（「北」「古人」「北家」など）約30点以上が確認されている。

3．下莇生田畑田遺跡[②] 幅1m前後の溝状遺構付近から出土。15枚以上が錆ついて重なっているため、すべて同じ銭種であるかどうか不明であるが、判読可能なものは隆平永寶であった。また、断定はできないが、伴出した遺物には9世紀初頭の墨書須恵器（「中」）があった。

5．下の宮遺跡[③] 斜面を採土中に、須恵器とともに出土。幅3mの間に40cmほどの間隔をおいて、短頸壷・長頸瓶・平瓶が並び、皇朝銭は3枚が土中に、残り22枚が平瓶と長頸壷に入っていたといわれる。その他、碗や皿のなどの底部や甕の破片が伴出している。須恵器の年代は8～10世紀に及んでいる。

6．松原遺跡櫛川地区[④] 松原客館推定地の発掘調査によって出土。共伴遺物は素文鏡、銅鈴、鉄製利器（刀子、火打ち鎌）、製塩土器、9世紀初頭の須恵器である。これらは、当時の波打ち際と想定される付近からまとまって出土した。

8．山ケ鼻古墳群[⑤] 地元の中学生によって偶然に発見された。出土地点は、尾根上に連続して築造されている古墳の鞍部からであつた。他に共伴した遺物は何も確認されていない。出土枚数は18枚以上と量的には下の宮に次ぐものであり、銭種も同様である。

9．田名遺跡村山地区[⑥] 圃場整備事業に伴う発掘調査によって、建物と想定される柱根列付近から出土。伴出遺物は9世紀後半の須恵器をはじめとして、墨書須恵器（「山本」「東」「乙家」など）、銅鈴、管状土錘、斎串、木簡などであった。遺跡は縄文時代から平安時代まで連綿として続く複合遺跡で、とくに5世紀末の祭祀遺物が大量に出土したことで話題になった。

13．船岡遺跡[⑦] かって昭和36年に同志社大学によって本格的な発掘調査が実施され奈良時代の大規模な製塩遺跡であることが明確になっていたが、隣接する地域に国道が通ることになり平成2年に発掘調査が実施された。皇朝銭は縦2m、横1.8m、深さ0.2mの土壙北側の海岸斜面からまとまって出土。萬年通寶4枚のみであるが、製塩に伴う祭祀に使用されたと考えられている。

以上主な遺跡を概観してきたが、これをみるかぎり、当時の越前・若狭において律令国家が期待した経済的な側面としての皇朝銭の流通は充分に行なわれなかったと推定される。むしろほとんどが宗教的な側面（祭祀）として使用されたと考えられるのである。

ここでその宗教的側面について若干の考察を加えてみよう。皇朝銭の通用期間は、708年から987年の仏事以外銭貨通用禁止までであるが、通用した時代以降の朝倉氏遺跡の場合は、当時のマニア的銭貨の

収集と考えられ、12世紀築造の深山寺経塚は明らかに経塚の埋納品であり奉賽銭として使用され、宗教的な側面を持つているといえよう。流通の時代では、発掘調査が実施された櫛川遺跡・船岡遺跡は明確に製塩に伴う儀礼行為がおこなわれたと考えられるし、丹生奥浦遺跡・阿納塩浜遺跡についても表面採集(以下表採）とはいいながら、それぞれの時代にあった製塩土器が多数共伴しているところから、やはり同類と思われる。これらの遺跡は当然ながら波打ち際にあり、祭祀の形態としては、製塩に伴う鎮火儀礼、あるいは海神に対する奉賽が考えられる。同じく発掘がおこなわれた田名遺跡・上莇生田・下莇生田遺跡はそれぞれ集落に接した遺構から出土しており、共伴する遺物の中に墨書土器がみられることから、村落内の有力な家長を中心とした村落単位での祭祀が執行されたと想定される。表採でありながら量的にまとまって出土したのは下の宮遺跡・山ケ鼻古墳群であるが、下の宮遺跡は久保智康氏の見解によれば８～10世紀のある時点で少なくとも３回以上の祭祀が同一場所において執行されたと考えられている。祭祀の意図であるが、久保氏の見解を援用すれば、両者は五穀豊饒や泰平吉祥を願う祭祀、氏族神あるいは祖霊にたいする祭祀、地鎮めの祭祀などの範疇におさまるものと思われる。

野々宮廃寺跡の場合、表採地は、寺跡の中心から約300m離れた地点であることから、寺域内と考えられ、下タ中遺跡も布目瓦の出土を考慮すると、両者は寺院に関係したものとも推定されよう。遠敷牟久遺跡は表採地点が若狭の国府域に関連する場所とも考えられるが、確実ではない。以上県内の皇朝銭出土の実態について述べてきたが、明確な遺構に伴ったものがすくないため、今後の出土を待ってさらに検討を続けて行きたい。　（仁科　章）

表１　福井県内皇朝十二銭出土遺跡一覧

No.	遺跡名	銭種	枚数	発見原因	伴出遺物など
1	福井市　一乗谷朝倉氏遺跡	和同開珎	2	発掘調査	五銖、貨銭、至大通寶
2	福井市　上莇生田遺跡江跨地区	和同開珎	1	〃	平安時代墨書須恵器
3	福井市　下莇生田畑田遺跡	隆平永寶	15	〃	平安時代墨書須恵器
4	武生市　野々宮廃寺跡	和同開珎	2	表面採集	字鉄砲町出土（２枚以上）
5	武生市　下の宮遺跡	和同開珎	8	〃	奈良・平安時代須恵器
	〃	萬年通寶	1	〃	墨書須恵器（桑田郷）
	〃	神功開寶	16	〃	
6	敦賀市　櫛川遺跡	和同開珎	5	発掘調査	素文鏡、銅鈴、刀子
	〃	神功開寶	1	〃	火打ち鎌、傾式製塩土器
	〃	隆平永寶	2	〃	平安時代須恵器
7	敦賀市　深山寺経塚	和同開珎	1	〃	鏡、金銅鈴、刀子、常滑甕
8	大野市　山ケ鼻古墳群	和同開珎	2	表面採集	銭種は不明だが他に３枚
	〃	萬年通寶	4	〃	
	〃	神功開寶	12	〃	
9	小浜市　阿納塩浜遺跡	和同開珎	1	〃	
10	小浜市　遠敷牟久遺跡	神功開寶	1	〃	緑釉陶器
11	三方町　田名遺跡村山地区	神功開寶	2	発掘調査	銅鈴、墨書須恵器、斎串
12	上中町　下タ中遺跡	神功開寶	1	表面採集	布目瓦、須恵器
13	大飯町　船岡遺跡	萬年通寶	4	発掘調査	船岡式製塩土器
14	美浜町　丹生奥浦遺跡	長年大寶	1	表面採集	吉見浜式、塩浜式製塩土器

注①栄原永遠男　「律令国家の経済構造」『講座日本史』　歴史学研究会・日本史研究会　1984
②山口 充ほか　『六条・和田地区遺跡群』　福井県教育委員会　1987
③久保智康　「皇朝銭を埋納する祭祀の一類型」『福井県立博物館紀要』第１号　1985
④山口 充　「松原遺跡」『福井県史』資料編13　考古　1986
⑤永見繁雄　「日本最古の奈良朝銭出土について」『奥越研究』第15号　1986
⑥田辺常博ほか　『田名遺跡』　三方町教育委員会　1988
⑦畠中清隆　平成２年度『若狭地域における発掘調査の成果』　若狭歴史民俗資料館　1991

資料紹介

さまざまな横杵

今では、臼・杵は餅つきくらいしか使われませんが、わずか数十年前まで、さまざまな「ものを細かくすること」に使われていました。今もよく目にする横杵は比較的新しく、江戸時代になって普及しましたが、いろいろな形の物があります。しかし新しいこともあってあまり詳細な報告はされていません。博物館で収集した資料の中からいくつかご紹介します。

①は、勝山市北谷町小原で収集。餅つきにも使われたようですが、ヒエの脱穀によく使われました。石川県・福井県の白山麓では焼畑で栽培したヒエの穂を、つき臼にいれて杵でたたいて実を落としました。柄～杵先の長さは約25cm、白峰などの同じ用途をもつものより10cmほど短く作られています。先は直径が14cm余り、元は10cm×12cmと、杵先の方が元よりも太く作ってあります。重さ2.6kg。杵先の直径は③に近く、身を円筒形にするとたいへん重くなるので元だけ細くして軽くしたのでしょう。例の少ない形をしています。

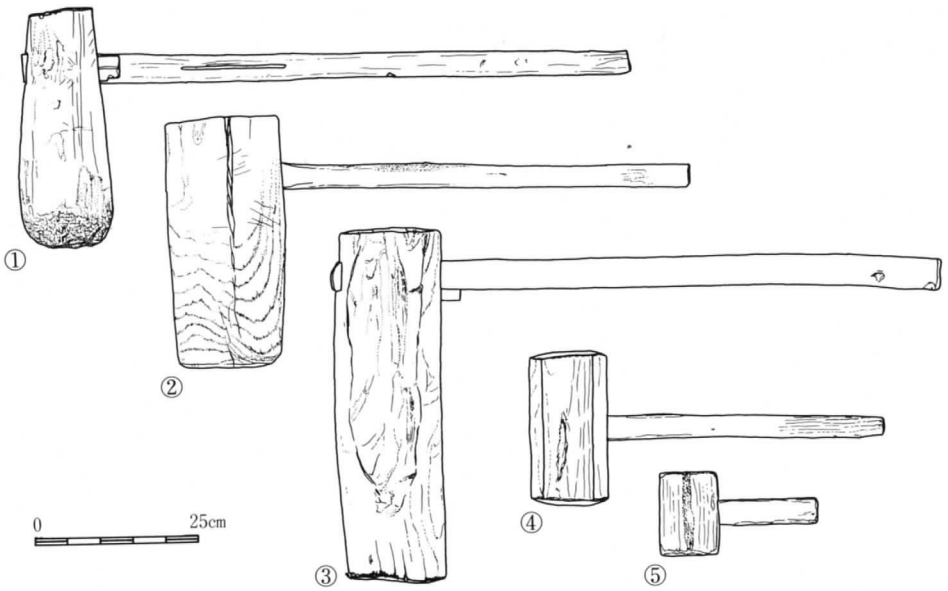
横杵の杵先は平らなのが普通ですが、この杵は中心部以外は半球形に磨耗しています。すりばちのような形の臼で粉ひきなどにも使ったのかもしれません。

②は、もみのノギ落しや、精米に使われました。杵先は直径16cm、元はやや大きく18cm前後、重さが7.2kg。僅かな米にこの杵をふりおろすと、ぬかを取るどころか粉ごなに砕いてしまいます。この杵は多量の穀物に与える衝撃でのぎやぬかをとるもの。その点で①と同じですが、杵先の広さ、重さを大きくすることで、作業能率を上げようとしていることが対照的です。収集地、池田町稲荷。

④は、小浜市須縄で収集。平な石にのせた葛の根にたたいて、でんぷん（くず粉）を取り出すために使われました。柄の取り付け位置が高く、柄～杵先が44cm余りあります。臼代わりの石の面が足元とほとんど同じ高さのためです。重さは 7.6kg。もちろん、高く振り上げたり、早いテンポで使うことはできません。荒く潰すには便利ですが、小刻みに使うには重すぎます。そこで④や、⑤が使われました。④は杭打ちにつかうかけやとほとんど同じ大きさ、形、⑤は木工用の木槌より少し大きい程度です。

ここでは用途による違いを見ましたが、杵には使い方、地域による違いもあります。ありふれたものですが、杵もさまざまな背景をもっています。

（坂本育男）



友の会会員募集！

平成４年度福井県立博物館友の会会員を募集します。

◆こんな特典があります◆

・博物館と友の会の行事をもれなくご案内します。
・常設展示を何度でも無料で観覧できます。
（家族会員は１度に４名まで）
・特別展の無料入場券が送付されます。
（家族会員は２枚）
・県外の博物館や史跡をまわる見学会に参加できます。
・友の会の会誌「Myミュージアム」をお届けします。
・館の広報誌「ふくいミュージアム」をお届けします。

◆会費（１年分）◆

一　　般	2,500円
大学生・高校生	2,000円
中学生・小学生	1,000円
家　　族	5,000円
賛助会員	（一口）10,000円

◆期間◆

平成４年４月１日～平成５年３月31日

◆入会の方法は◆

入会申込書（博物館にあります）にご記入のうえ、会費を次のいずれかの方法で入金してください。

直接、博物館内事務局へ
お近くの郵便局から郵便振替で（申込書は別送）
口座番号　金沢5－23379
加入者名　福井県立博物館友の会
現金書留で郵送（申込書を同封）

☆入会手続き終了後、会員証をお渡しします☆

ビデオライブラリーから

鳥浜貝塚　－縄文時代のくらし－

鳥浜貝塚は、三方郡三方町鳥浜にある縄文時代前期（6500年前）を中心とする貝塚です。貝塚とは、縄文時代のごみ捨て場です。鳥浜貝塚では、貝殻、動物の骨、石器、土器など腐りにくいもののほかに、木や草の実、木製品など、ほかの貝塚では腐ってしまうようなものが、大量に残っていました。この番組では、鳥浜貝塚から復元される縄文時代のくらしを紹介しています。

鳥浜の縄文人は、春から秋にかけて目の前の三方湖で魚をとるほかに、春には山菜や貝を、夏には海に出て魚を、秋には木の実やヒシの実を、冬には鹿や猪をとって食料にしていました。

彼らは、木の性質をよく知っていて、斧の柄、弓、丸木舟、うつわなどをそれぞれに適した種類の木材で作っていました。また、植物の繊維を使って縄や編物を作ったり、漆もさまざまなところに使用していました。このほかに糞石（縄文人の大便）も発見されていて、彼らの食生活や健康状態を知る手がかりとなっています。

鳥浜貝塚の発見によって、私たちは縄文時代のくらしを、よりいきいきと復元することができるようになりました。（中原）

遠敷（おにゅう）のこども神輿（みこし）

「学校から注意されるかもしれんけんど、覚悟しとけ」－こども神輿の準備を始める最初の日、子供組の大将は、子供たちを前にこう言いました。

小浜市遠敷では、田植終了後のサツキヤスミの日に、田の神祭りのこども神輿がくりだされます。

祭りは、小学１年生から中学２年生までの男の子たちだけで行われ、大人は手を出しません。中学２年の大将の指揮監督のもと準備が進められます。

祭り前日には「篭（こも）り」といって全員で神輿宿に泊ります。夕食では、大将にだけお銚子が１本つけられます。祭り当日、神輿をかついで村じゅうを廻って集めたお賽銭（さいせん）は、大将が全員に分配します。大将の取り分は小学生の数十倍にもなります。このように、子供組内での序列ははっきりしています。

篭りの日には、近くの村へ、神輿宿を飾る榊を奪いに行きます。子供たちの激しい攻防は、夜を徹してくりひろげられます。こうした競争意識は、自分たちの村を守る力となっていったと思われます。

学校での教育とは別に、こうした村の行事を担っていくことで、子供たちは大人へと成長していったのです。最初の大将の言葉には、村の一員としての責任感が感じられます。（田中）

情報をお寄せください。

「夢楽洞（万司）」の絵馬

○　「夢楽洞（万司）」の絵馬をさがしています。夢楽洞は、明治末期ころまで活躍した福井の絵馬屋です。

○　本県の嶺北から隣県の加賀・能登地方の神社に、夢楽洞（万司）の絵馬がたくさん残されています。なかには、「万司仙人」・「万仙」・「仙家」・「万司」・「馬琴」・「一仙」などの署名もみえます。

○　とくに、江戸時代の文化・文政期（1804～1829）のものが多く、型紙を使って大量に作られたようです。

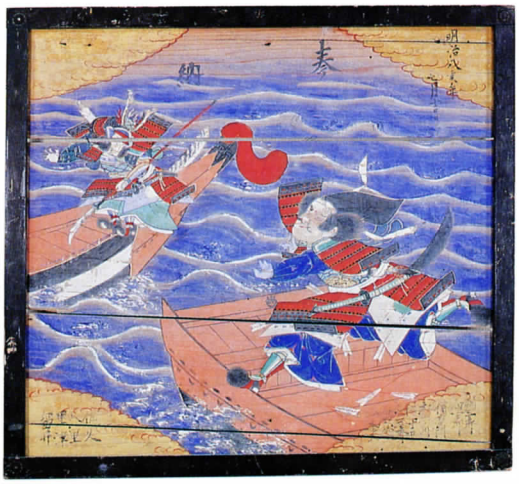
○　夢楽洞（万司）の絵馬が、どれくらいの範囲をもって分布しているのか。また、人びとがどのような動機でこれを奉納したのかを調べています。

○　みなさんの地域の神社に夢楽洞（万司）の絵馬がありましたら、どうかご連絡をください。

勝山市谷　伊良神社蔵

勝山市布市　少名彦神社蔵

勝山市片瀬　白山神社蔵



松岡町湯谷　神明神社蔵

ふくいミュージアム
No.21
1992．3．31発行
編集発行　福井県立博物館
福井市大宮２丁目19－15
〒910
☎0776－22－4675㈹
印　刷　出口印刷株式会社

福井県